

所 陵

ISSN-0913-1906

No.23

関西大学考古学等資料室彙報

平成3年5月31日発行



須恵器（愛媛県北谷古墳出土・6世紀前半）

目 次

誉田断層と応神陵との関係について	2
平成2年度調査報告「宮崎県・鹿児島県」の遺跡及び博物館施設	5
徳島県立鳥居記念博物館	8
大阪市立自然史博物館	10
車馬鍬の登場	12
博物館学課程開設30周年を迎えて	14

関西大学考古学等資料室

〒564 大阪府吹田市山手町3丁目3の35

Tel 06-388-1121 (内線3341)

誉田断層と応神陵との関係について

網 干 善 教

I

1989年3月、大阪府教育委員会は『大水川改修にともなう発掘調査概要・VI』を刊行された。そのなかに「応神陵古墳外堤・II」と「古室遺跡・IV」が収録されている。これは「例言」に示されるように1級河川大水川改修工事に伴い、昭和63年度事業として大阪府土木部の依頼をうけ実施され、平成元年3月31日終了した調査であるが、その内容について疑問とするのは、「第IV章 調査のまとめと検討」のなかの寒川旭氏による「第2節 誉田断層と本調査の成果」の記述である。ただし、その内容は工学的（地質学的）な面からの専門的な見解であって、この面に関し素人的な筆者にはすべて理解できているとは思ってもいないし、若し筆者が抱く疑義について誤解の上での疑事であるかも知れないという危惧がある。

II

さて、記述内容のうち考古学的調査の所見としては「第IV 調査のまとめと検討」の章に「第1節 笠形木製品の出土他」の1項があり、ついで「活断層と応神陵古墳墳丘の関連性と大水川前身河道の位置」について次の如く述べられている。（引用文中理解を容易にするための①②③の段落は筆者が行ったものである）

- ① 古室遺跡において断層を確認しており、この方向と応神陵古墳墳丘前方部の崩壊部とは相似た位置にある。
- ② この応神陵古墳前方部の崩壊部は従来より調査中の大水川の前身河川を迂回させたためとの説があったが、前方部中央部から西へ100mの間は東西方向の「外堤を画する溝」以外には古墳時代の遺構関連としては見出しにくく、むしろ外堤と直交するような南北方向の溝は、調査区の西端、笠形木製品の直下で古墳時代中期中葉の溝を検出したにとどまる。
- ③ このことから応神陵古墳築造前の大水川河道は笠形木製品を出土した地点付近を東限

として、それより西側で展開する公算が極めて大きくなったと言える。

④ それは大水川の前身河道が現在の応神陵古墳西側周濠範囲内のコースを主流路の一部としており、それを利用するようなかたちで逆に西側周濠にあて、活断層運動の隆起部分を墳丘中心部にとり込んだことを示す。

⑤ つまり応神陵古墳墳丘の前方部の崩壊は大水川の前身河道に影響を受けたことはほとんどなく、寒川旭氏が指摘する応神陵古墳築造以降の地震の有無はともかくとしても、活断層線上に墳丘の一部をおいたことがその主たる要因として注目できる。

以上が報告書に記載された発掘調査担当者の意見である。要するに①では古室遺跡で確認した断層の方向が応神陵前方部の崩壊部分と相似し、②ではこれが大水川の前身河川の迂回による原因とは考え難い。③それは大水川の西側のことであり、④西側周濠内であって、墳丘は活断層運動の隆起部を利用しており、⑤そのことから前方部の崩壊は大水川の前身河道の影響ではない。故に寒川氏の指摘はともかくとして断層上に墳丘の一部を置いたことが（前方部崩壊？の）主たる要因として注目できるという内容である。すなわち応神陵古墳の一部は活断層に乗りかかって築造されたということである。

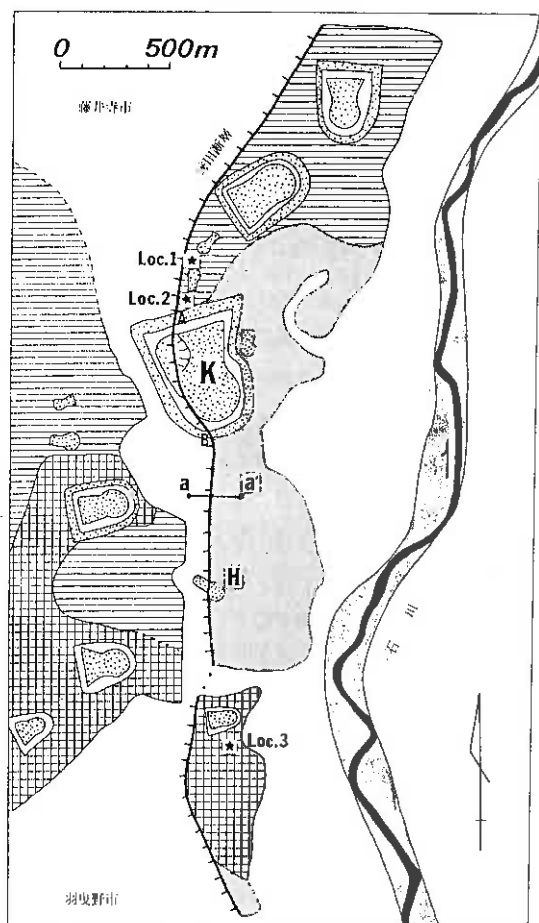
III

そこで寒川氏の見解を挙げることにする。同氏の「誉田断層と本調査の成果」の内容は三つの項からなる。(1)地震と活断層 (2)誉田断層と古市古墳群 (3)遺跡における地震跡。

そのうち(1)では「大きな地震は活断層の活動によって発生する」とし、活断層の重要な性質を挙げられている。

(2)では誉田山古墳（応神陵）の中堤の北側と南側に最大1.8mの東上の食い違いがある。日下雅義氏はこれを誉田山古墳を南北に横切る活断層による変形と考えられた。さらに寒川氏は、

○古墳中堤の変位量は最大1.8m。



1 菅田面 2 道明寺面 3 野中面 4 古墳 5 崩壊地形
K 菅田山古墳 H 白鳥神社古墳

fig. 53 菅田山古墳周辺の段丘面の分布と活断層(寒川, 1986)

(大阪府教育委員会刊行報告書より転載)

○段丘面は新旧3面に区分され、最も新しい時代に形成された菅田面は概ね2万年前頃。
○この面の段丘堆積物が6mの変位を示しているので、平均変位速度は0.3m/10³年となる。

○この値を経験式に代入すると菅田山古墳を変位させた地震の規模はM7.1、断層の長さは23km前後、地震の周期は5000~7500年となる。とし、その結果として

「菅田山古墳は5世紀中頃に形成されたと考えられているので、地震の時期はこれ以後であることは確実」

とした上で大阪平野東部に著しい被害を生じた地震を古文書で検討すると、1510年(永正7)の摂津・河内地震のみが該当するとされる。

そこで疑念をもつのは、地質学的にみて、菅田断層と称される活断層があることは事実であろう。考古学的調査の報告に記される如く応神陵がこの断層の上に築造されたことも事実であろう。そして応神陵築造後にこの地域に大地震が起ったことも事実であろう。

しかしながらこの地震によって活断層が起り、応神陵周濠中堤に1.8mもの断層変位が生じたことや、前方部が崩壊したのは永正大地震であるとするのは科学的でない。それは永正大地震によって瞬間的に古墳の堤防に1.8mの断層変位ができれば周濠内に貯水されている水はどうか。恐らく水害を起すであろう。果して永正地震の記録のなかにそのような記録があるのかどうか。そして、そのあと現状の応神陵を見ると内、外周濠とも豊かな水を貯わえている。若し永正大地震によって周濠の西半部が変位したとすればその修復は一体いつ、どのように行われたのか。そしてその痕跡が実証的に認められるのかどうかという疑問である。

IV

この永正大地震と呼ばれるものについて関西大学工学部土木工学科谷口敬一郎教授より、2編の資料をいただいた。その1編は文部省震災豫防評議会編『増訂大日本地震史料 第1巻(自懿徳天皇後宇、至元録七年)』(鳴鳳社刊)である。それによると、

「永正七年八月八日(1510年9月21日)摂津、河内二国、地大ニ震ヒ、四天王寺ノ石華表崩レ、藤井寺潰レ、摂津ノ海岸ハ津波ノ襲フ所トナレリ、山城、大和両国モ亦強ク震ヒヌ」

とある。そしてこの地震のことを記録した文書の記載内容が挙げられている。

『尚通公記』『実隆公記』『拾芥記』『古文書類纂』『多聞院日記略』『長享年後畿内兵乱記』『年代記抄節』『高代寺日記』『新選和漢合図』『続史愚抄』『足利季世記』『重編応仁記』『盛衰通記』『中古日本治乱記』『興福寺年代記』『永正元年記』『剛琳寺文書』『暦仁以来年代記』『天王寺誌』『華頂要略』『常光寺文書』『四天王寺金堂本尊

再興勸進帳』『大日本府県志』『続本朝通鑑』などである。

地震があったのは「八月八日暁」であるらしいが、なかには「八月七日」とする記録の誤記らしいものもかなりある。

それはそれとして、その表現に誇大的な記述もあるが、概して四天王寺の石鳥居と若干の寺の倒壊を挙げているのみである。そしてこの地震によって津波以外の水害が起ったことはみられない。そうだとすると記録がないからなかったとは言いがたいが、応神陵周濠堤防の崩壊による水の被害については疑問としなければならない。

もう1編は萩原尊禮編（藤田和夫、山本武夫、松田時彦、大長昭雄著）の『続古地震—実像と虚像』（東京大学出版会）である。

このなかに「六、永正七年（1510）八月八日の地震」（この項藤田和夫氏担当）があり、次の如く記述されている。

「菅田断層の変位を天平六年四月七日地震に帰した以上、従来古墳崩壊と関係づけられてきた永正七年八月八日地震について再検討を加えなければならないであろう。

永正地震の震央については（右記によれば）北緯三四・六度、東経一三五・七度とあり、この地点は奈良盆地西縁の、大和川断層に沿う王寺附近ということになる。これは被害状況とはかみ合わず、宇佐美龍夫は『新編日本被害地震総覧』において、東経一三五・六度と震央をやや西の八尾市南部に移した。寒川旭は、これに基づいて菅田断層の活動を永正地震に帰したと見られる。」

とある。震央と被害状況がかみ合わないからといって緯度をずらしたり、そのずらした仮定に基づいて立論の根拠にするのはどうかとも思われる。

なお、この永正地震によって、河内の藤井寺や常光寺が潰れたということについて、

「藤井寺は地震の前の戦火により、かなり荒廃していた可能性があり、四天王寺と常光寺の被害のほうの実質的には大きかったと見られるのである」

とも記述されている。そして

「永正の地震は菅田断層を含む生駒断層系の活動に帰するよりも、長居断層を含む上町

断層系の活動に帰するほうが妥当と思われる」

とし、さらに永正の地震による四天王寺の被害について

「菅田断層を含む生駒断層系の活動によるとするよりは、上町断層系の活動に帰するほうが説明しやすいことは確実である」

と述べられている。なお、ここではこの地震の規模は「六級」と想定されているのに対して寒川氏は「M7.1」とある。

V

応神陵前方部の崩壊が果して事実かどうか。そしてそれが崩壊であるとするならば、その理由は何か、さらにその時期は何時かという問題はわが国最大の規模をももつ応神陵であるから重要な課題である。

このことについて工学的な菅田断層についての見解を示されることに筆者はその真為を確かめる能力はない。したがって示された記述にしたがうより方法はないが、その学界においても見解にかなりの相違があるように見受けられる。筆者もまた同じであり、その見解に疑念を抱く。

要するに菅田断層は存在していたであろう。しかしその活動が応神陵築造よりはるか以前なのか、あるいは築造後なのか。若し築造後1.8mもの食い違いが生じた場合、周濠はどうなるのか。しかもそれが周辺にどのような被害をもたらしたのか。そして現状が満水状況の周濠であることに対してこの1.8mという差を何時、どのように修復されたのか。その実証的根拠は何か。さらに、それが応神陵のなかでどこまで確かめられているのか。すなわち、この見解がボーリングなり、測定なりの工学的調査の結果に基くものなのか、それとも遠く離れた地点間の観察で、単にその間を結んだだけのものなのかどうかということも明確にしなければならない。

また、応神陵築造後若しそのような被害を与えたとされる地震を、永正七年の地震とする自然科学的な根拠はどこにあるのかという論拠が明確に示されない限り、この推論は稔り少ないものになってしまうかと危惧するものである。

平成2年度（1990）調査報告

「宮崎県・鹿児島県」の遺跡及び博物館施設

角 田 芳 昭

考古学等資料室の資料について毎年その出土地の確認、写真撮影など調査を実施し、その結果を報告してきたが、平成2年度は南九州宮崎県、鹿児島県の所蔵資料につき調査及び施設見学を行なったので、ここに記しておきたい。

本学所蔵資料として「日向国東臼杵郡平岩村」「児湯郡美々津町美々津」「持田村」「津農郡村荒武」「内野々村」「上江村守上江」「宮崎郡佐上原町」「西臼杵郡高千穂町」「東臼杵郡南方村守天下伊舞野」（石鏃・石斧・石錘等）「大隅肝属郡天ヶ谷西俣小葛原」「大隅国始良郡福山中学校敷地」「薩摩国指宿郡指宿町摺ヶ浜丘上」「指宿郡指宿町橋牟礼川岸」「指宿郡額姓仙田水車場上断」（弥生土器・石斧・円形石等）の遺跡名が『本山考古室要録』に見える。これらの遺跡の現状確認と同地の博物館施設も見学することを目的に実施した。調査は平成2年9月28日・29日・30日の2泊3日を要し、文学部網干善教教授（資料室管理運営委員長）指導のもとに角田芳昭が同行した。

9月28日（金）8時25分宮崎空港に着く。野間重孝氏（宮崎市教育委員会主幹）が出迎えて下さり、早速「宮崎県総合博物館」を最初に見学した。沿革は昭和26年宮崎神宮徴古館資料、県立上代日向研究所資料等により、同神宮内に県立博物館として発足した。43年分館として西都原資料館を開館、46年明治100年記念事業の一環として博物館、美術館、県民文化ホールを建設、



宮崎県埋蔵文化財センター

西都原資料館を加え宮崎県総合博物館として運営されるようになる。48年民家園を開設し、57年埋蔵文化財センターを附設・総合文化施設として社会教育に寄与し、県民の文化美術意識は他県と比し非常に高い。近藤協学芸員のご案内にて館内を見学する。自然、歴史、民俗、美術、工芸等のジャンル別に展示され、それぞれに解り易く解説、紹介されている。青島、霧島の自然、西都原古墳群、持田古墳群出土資料、高千穂、椎葉、来良地方の習俗、習慣などが実物資料、パネル、模型、写真などにより展示されている。また、日本画家の山内多門、洋画の伊達孝太郎など先駆者を見ることができる。総合博



宮崎県総合博物館



鹿児島県歴史資料センター「黎明館」

博物館にふさわしい内容であった。続いて隣接の「埋蔵文化財センター」を見学させていただく。埋蔵文化財の調査研究、資料の保存活用、図書の収集、専門技術的な研修及び指導、普及啓蒙活動等を目的に、昭和57年10月より活動されている。1階は保存処理、展示室があり、2階は収蔵室、研修室、図書室、写場、暗室等で総床面積1517㎡の鉄筋2階建である。県下の主要遺跡を調査し、収蔵活用までの行程をわかりやすく展示され、重要な遺跡は復原などの処置がとられている。永友良典主任技師のご案内で、それぞれの部屋を巡り、貴重な資料も見学させていただいた。当センターの重要度はますます高くなるに違いない。

午後より野間氏のご案内にて、わが国においても著名な「西都原古墳群」「持田古墳群」その他近郊の遺跡を見学及び調査を行なった。わが国の古墳群の中でも特に著名な九州の古墳であり、御陵墓も含まれている「西都原古墳群」は東西約1.3km・南北約3.2kmで海拔50～80mの岬様台で、昭和9年5月国指定史跡とされ、昭和27年3月国指定特別史跡西都原古墳群となった。この特色は少範囲の地域に様々な形の古墳が群集し、保存も極めて良好であり、わが国最初の大規模な学術調査が大正元年（1912）から6ヶ年にわたり行なわれ、数々の学術成果があがったことにより、考古学が画期的な発展をとげる一因となった。現在309基が確認されている。代表的な古墳は御陵墓の男狭穂塚と女狭穂塚やその陪冢の飯盛塚（169号墳）、雑掌（殺生）塚（170号墳）、姫塚古墳、鬼の窟古墳などがあり、墳形は前方後円墳、方形墳、円形墳である。本学所蔵資料の根幹を成す本山コレクションの蒐集者本山彦一翁（元毎日新聞社長）も発掘の模様を視察されており、考古学者柴田常恵氏の談話がある。（『松陰本山彦一翁』）

大正元年十二月宮崎県の西都原の古墳調査には東西の大学を始め宮内省、博物館等の担当者が集まり発掘することになり、関係者の範囲が多方にわたり、世間の視聴を惹いた。「大毎」「大朝」両新聞とも記者を特派していたが、翁はこれに満足せず、調査の實際を観るため、わざわざ来りて数日間滞在された。翁の古墳の研究が如何にも熱心で、それも娯楽的の興味より来るものでなく、根底ある主張に基くと共に、造詣

の深いことを知って驚いた。……また専門家の研究を輔けて、その達成を計ると共に、一部にのみ限局され勝なこの方面の知識を、広く社会に発表してその普及に努めるなど、単に古墳に



指宿橋牟礼川遺跡保護標識



橋牟礼川遺跡出土須恵器（本学蔵）



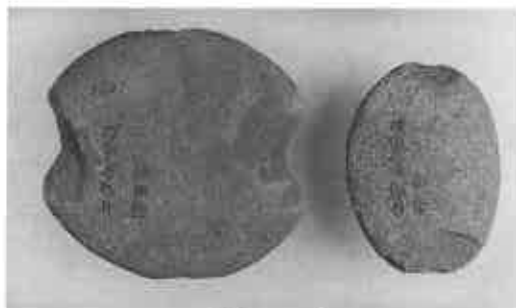
同上裏面

限らずして、考古学の一般に対する有力な保護者であり、関係者であると思われた。

この時浜田青陵博士や新進考古学者柴田常恵氏等の学者と相識ることになった。当時より既に約80年近い歳月が流れているが、貴重な文化遺産として人々に守りつがれたことに喜びを感じた次第である。御陵墓地の見学については特別の許可を受け、宮内庁書陵部桃山陵墓監査事務所陵墓守部緒方吉信氏のご案内にて詳細な見学ができ、研究上に非常に役立つ成果があった。その後持田古墳群、佐土原町の古墳を見学した。持田古墳群周辺出土の「石鍾」資料が本学に2点所蔵されているが、26号墳を見学した折、北側より偶然1点の石鍾を表面採集した。(横5.8cm 縦7.4cm)本学資料と対比、研究することにより新たな発見もあろう。日南海岸を南に向い宿舎に帰りついた頃は季節はずれの暴風雨で、それも宮崎市中心部を台風が通過するとのことで物すごい風雨であった。翌日早朝列車は不通とのことで鹿児島行高速バスにて宮崎市を出発する。途中風雨の中を無事鹿児島へ到着し、鹿児島県歴史資料センター「黎明館」調査史料課主査池畑耕一氏の出向えを受ける。風雨が強い中午後より「黎明館」を見学する。カタログで大体の内容を知っていたが、実際の建物を見て驚く、敷地面積44.475㎡もあり、広く、ゆったりし、また資料の展示も素晴らしい。テーマ展示「西郷と大久保」の特別展を企画されており、NHK大河ドラマでも西郷隆盛を放映していた関係で鹿児島ブームが起り入場者も多いと聞く。部門展示でも歴史、民俗、美術工芸資料が展示されており、総合博物館にふさわしい。研究会、講演会等も活発に行なわれている。また館長井之口恒雄氏、副館長市来敦志氏からも館の歴史、概要等の説明を受けた。引き続き県立の博物館を見学した。宿舎の「城山観光ホテル」へ到着した頃には台風も過ぎ去り、鹿児島湾を一望する場所で、その向こうに桜島が遠望され、かなたに『虹』が映え素晴らしい景色である。第3日目は池畑耕一氏、腰 高行氏のご案内にて霧島高原ハイウェイを南へ下り、指宿郡の摺ヶ浜、仙田、橋牟礼遺跡等の調査見学を行なう。地元指宿市教育委員会社会教育課文化係主事下山寛氏が中心となり案内して下さる。前述の本山彦一氏も大正15年(1926)3月17日指宿郡額姓村

仙田を訪れると記録にあるので、この地方の所蔵遺物はこの時に蒐集されたものでもあろう。昨年度指宿橋牟礼遺跡を市教育委員会が学術調査され数々の成果が得られた。『日本三代実録』に記されている開聞岳の大噴火(西暦874年)による火山灰層の調査で当時の生活状態が解明されたり、多くの土器も発見された。現在も調査中で、15ヘクタールの買収が進み整備が行なわれており終了したら史跡公園計画も出ており、貴重な文化遺跡として保存してもらいたいものである。本学資料も古墳時代出土土器で大正15年3月17日採集されたものである。下山氏のご説明にて本学所蔵資料も同質同型のものでこの遺跡より出土したことはほぼ間違いないと考えられる。引続き摺ヶ浜、仙田等の遺跡を見学する。近くに開聞岳の雄姿を見、感激する。思わずシャッターを切る。さらに南下し薩摩半島最南端の長崎鼻まで足を延ばす。霧島屋久国立公園の一部で絶景である。最後に鹿児島空港へ向う折「隼人塚」を見学した。成務・仲哀両天皇を祭った塚といわれる。

特に池畑耕一氏には両日にわたりご案内下されるとともに、多くの参考資料・文献の提示を受け、また遺跡について多くの教示を受けた。感謝申し上げる。記名していない多くの方々のご指導ご協力により無事調査を終えた。ご便宜をいただいた方々に感謝致す次第である。



持田古墳群出土「石鍾」本学蔵



持田古墳群採集「石鍾」

徳島県立鳥居記念博物館

松 浦 章

1 緒言

1902年(明治35)の7月から翌年の3月までの九ヶ月に涉って、東京帝国大学より中国への人類学の調査を命ぜられ、西南地区において苗族等の調査に従事されたのは徳島県出身の鳥居龍蔵博士であった。

鳥居博士は1870年(明治3)4月4日に阿波国名東郡徳島船場町で誕生された。その後、高等小学校、中学校の課程を独学自習された。そして1886年(明治19)に成立間もない東京人類学会に入会され、また徳島に来訪された後の東京帝国大学の人類学教室教授坪井正五郎氏との出会い等が鳥居博士が東アジアの人類学・考古学の研究分野に進まれる大きな契機となった。

鳥居博士は1893年(明治26)に坪井教授のもとで東京帝国大学理科大学人類学教室標本整理係となり、ついで1898年(明治31)同助手、1905年(明治38)に講師となられた。助手時代の調査が上記苗族調査であり調査中の日記が1926年(大正15)8月に富山房から出版された『人類学上より見たる西南支那』(以下『西南支那』と略す)である。

2 鳥居博士の記録に見る清末西南地区資料

『西南支那』は清末の中国における西南地区の社会風俗等の状況を詳細に描写しており、歴史研究にとっても有益な資料を提供している。

鳥居博士は1901年(明治34)7月31日に横浜を出港し、8月6日に上海に到着した。さらに漢口へ赴き同地より湖南を経て貴州に至るのであるが、その際の交通手段を『西南支那』には次のように記されている。

漢口から湖南を経て貴州に入るには、先づ揚子江を横断して洞庭湖に入り、湖上を通過して常德に出で、それから貴州境近くを発源して洞庭湖に注ぐ所の沅水を溯るのである。此の水路の通船は小形の支那船であつて、貨物と旅客との輸送を目的とし、多く貴州省に接近したる湖南麻陽県人の稼業とする所である。余は此の小形の麻陽船を雇ふて漢口を出発し

た。

1907年(明治40)7月に出版された『苗族調査報告』の第一章「旅行ノ順序及ビ日程」によると8月24日に漢口を出発して貴州省の鎮遠府に到着したのは10月7日であった。この間44日を要し、同報告にも麻陽船を使ったことが記されている。途中の洪江司は『西南支那』に、

洪江司は州県でなけれども、市街の大きなことゝ戸数の多いことは、遙に州県に優るものがある。特に商業の盛んなことは、州県に於ても稀に見る所であつて、湖南省及び貴州省から上下する貨物は、一旦悉く此處に集合して、それから更に各地方に輸出されるので、湖南・貴州間に於ける物資聚散の中央市場である。随つて商船や旅客の往来は最も頻繁で、市街は何時も繁昌を極めるのである。

とある。貴州省の鎮遠府については、鎮遠府は此の沅水の一支流に跨がれる市街で、沅水上流の地方庁の所在地であり、且つ貴州・雲南の地方より湖南・湖北の方面に対する交通運輸の要衝に當つて居るから、常に貨物輻輳・商船の往来頻繁で、随つて市街股脈、山中としては立派の都会である。現に段々鎮遠府に近づく、沅水に許多の商船が碇泊するを認めた。

とあり、鎮遠府の賑いが知られる。

調査中の帰路に當つた四川省内の長江流域に位置する叙州、瀘州、重慶等の状況についても『西南支那』は描写している。

叙州は岷江と金沙江との合流する三角地点にあつて、其の州の首府であるから、一つの城郭をなして、叙州城と称せられて居る。知府衙門其の他の役所もあり、市街も城内にあつて、四方塼を以て築いた城壁を遶らして居る。金沙江と岷江を控へて、交通運輸の便を占めて居る為めに、一方は雲南省から来る貨物を集め、一方は四川省の貨物を雲南に向つて送る場所であり、実に此の両者に取つては大切な中心市場である。

瀘州については、

瀘州は揚子江上下の船の多く停泊する處であつて、商業頗る盛んに、此の辺では有数の河港である。

とある。そして四川省の重要な商業地である重慶については、次のようにある。

重慶は長江の流れを控え、諸水の此處に合するあり、成都にも又長江の下流地方にも船楫の往来の中心地となつて居るから多くの商客は此處に輻輳し一種の舟つき場の氣分に充つて居る所である。貨物も此處から集散せられて居るのである。

上述のように『西南支那』の叙述は、清末中国の西南地区の諸都市等に関しても貴重な記録を含み交通・商業資料としても極めて重要である。

3 鳥居記念博物館

鳥居博士は上述のように中国の西南地区のみならず、日本国内は無論、中国東北地区、台湾、モンゴル、北千島、朝鮮半島、サハリン、東部シベリアやさらに南アメリカへ調査に赴かれ多くの業績を残された。発表された研究等は『鳥居龍藏全集』全十三巻（朝日新聞社、1975年）としてまとめられている。

これら鳥居博士の業績を顕彰するため1965年（昭和40）3月24日に鳴門市の妙見山公園の山頂に開館されたのが徳島県立鳥居記念博物館である。同館は四国と淡路島を結ぶ大鳴門橋が見える風光明媚な地にある。

同館は三層天守閣様式の四階建て（写真①）で、一階は事務室、研究室等があり、二階・三階が鳥居博士の収集品（写真②、③）、研究物、遺品が展示されている。四階が展望室であり鳴門市周辺から淡路島まで見渡せる。同館では鳥居博士の業績を展示するのみならず、これまで『図説鳥居龍藏伝』（1965年）、『鳥居記念博物館図録』第1集（1976年）、同第2集（1983年）、同第3集（1987年）等を出版している。

4 小結

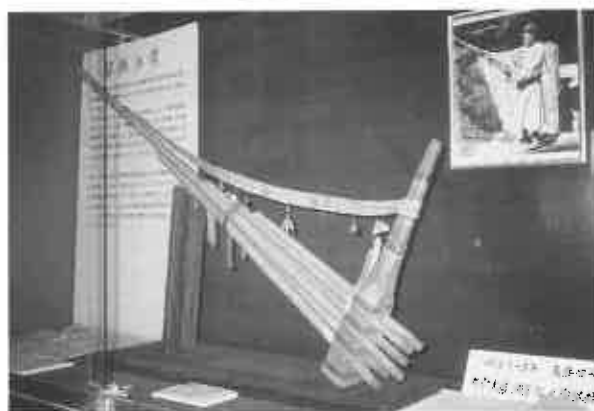
鳥居博士は1939年（昭和14）到北京にあった燕京大学の客座研究教授に招聘され、一家をあげて北京に赴かれた。そして1951年（昭和26）12月に帰国されるまで、明代史研究に重要なアムール川河口にある永楽時代に設置された奴児

干（ヌルガン）都司についての論考を『燕京学報』に発表される等の業績をあげられた。しかし鳥居博士逝去後40年に近い今日においても東洋史学界は、博士の業績を十分に継承発展させていないと言える。

なお鳥居博士の御次男鳥居龍次郎氏が同館の運営に尽力されている。



写真① 鳥居記念博物館



写真②「苗族の筐」（1902年調査）



写真③ 興京老成の門額拓本（中国遼寧省、1907年調査）

大阪市立自然史博物館

鉄 川 精

1. あゆみ

昭和25（1950）年11月に大阪市立自然科学博物館として市立美術館2階廊下にて展示開設。32年に靉公園に移転、44年から新館建設構想をねり始め5年間の準備期間を経て、49年4月に市立自然史博物館として長居公園に開館。59年に開館10周年を記念して常設展更新計画が策定され61年4月に展示室を一新し開館した。筆者は59年12月から61年3月末の常設展更新業務完成までの間、非常勤学芸員を委嘱され更新業務に参画した。

2. 自然史とは

自然史というのは、Natural history の直訳で明治時代には博物学と訳されていた。博物学は、自然界の諸現象・諸事物に関する広範囲な知識を集積する学問という意味である。

自然に関する知識を広く集め羅列的かつ枚挙的に理解しようとするのではなく、全体像を把握するために、自然界の法則性や自然と人間のかかわりを発達史的見地から理解するより他に方法がない。これこそ科学を市民のものとし人間の未来を保障する道なのである。そのような意志のもとに自然史と表現したのである。

市立自然史博物館は、以上のような目的でつくられ展示もこの線にそって展開されている。展示は、ひとつのストーリーによって組み立てられ、それは27のテーマから成る。テーマは幾つかの小テーマに分かれABCの記号が付けてある。第1展示室入口から1A→1B→1C→1D→1E→2Aの順に見ていくと、ストーリーがなめらかにわかる。

3. 事業内容

自然界の構造と機能に関する理解を深め、自然発達史の頂点に位置する人と自然のかかわりを大阪という身近な自然をもとに追求するとともに、これらに基づく社会教育を行うことを目的として、具体的には次の4分野の活動を行っている。



写真1 大阪市立自然史博物館正面

（1）調査研究活動

学芸系スタッフ全員は学芸課に所属し、地史・第4紀・動物・昆虫・植物の5部門の研究室で研究業務に携わっている。自然の生いたち、生物の分布と変遷、生物の系統分類、自然保護に関する基礎的な調査研究を行い、研究成果は、諸学会の学会誌や自然史博物館発行の刊行物などに発表している。

（2）資料収集保管活動

自然界に存在する物質資料（一次資料）それに関連する二次資料を系統的に収集し整理し保管することは、自然史系博物館の基本的任務のひとつである。博物館資料は、研究・展示・教育などに利用するだけでなく、将来のために永久に保存すべき自然界の記録であるとともに、市民が多角的に利用できる貴重な財産でもある。

収集される資料は、大阪を中心にして近畿地方、日本全域、さらに全世界へと広範囲におよぶ。外国の資料については、自然史博物館の研究課題に基づきユーラシア大陸の東南部に主たる重点をおいて収集するようにしている。館員による収集や購入だけでなく、市民からの寄贈、国内・国外の博物館や大学との資料交換などによる資料総数は90万点を越えている。現在研究中や未整理のものを除くと、登録済標本数は収蔵標本数より少ない。5部門を通じて平成元年

度末における整理済標本は734、048点であり、未整理標本は180、434点である。

自然物を標本にした場合、その性質により①乾燥標本、②液漬標本、③封入標本に大別され、生物系・地学系ともそれぞれに適合した保存形態がとられている。

乾燥標本—生物系では、植物腊葉（おしば）、キノコ類、材など、昆虫、動物剥製、動物骨格、貝殻などである。植物腊葉は一定の大きさの台紙（大阪自然史博物館：440×310mm、110～135kgの上質紙）

に符箋とともに貼り付けて保存し、密閉できる戸棚に防虫剤（ナフタリン）をいれ保管する。昆虫は展翅などで形を整えて乾燥し必要に応じて防腐処理をし、昆虫針にラベルと一緒に刺し昆虫箱に立てて保存する。昆虫箱の左側の溝にあたためてとかしたナフタリンを流しこみ固める。昆虫箱は害虫の侵入を防ぐとともに防虫剤の消耗を防ぐため、気密性のよい構造になっており、密閉できる戸棚に保管する。これら生物系乾燥標本のすべては、年間を通して気温18℃、湿度60％に調整された第2収蔵庫（2階）に保管されている。地学系では、岩石、鉱物、化石、微化石などである。

液漬標本—主として魚類・両生類・ハ虫類・クモ類などが液漬標本として保存される。保存液は、60～80％アルコール液またはホルマリン10倍液である。容器には標本びん、広口びん、マヨネーズびんなどが用いられる。液漬標本を収納する棚には、地震によりすべり落ちないよ



写真2 昆虫の整理棚

うにストッパーがつけてある。

封入標本—生物系では、動植物の組織や花粉をパラフィンまたはグリセリンゼリーで封入したスライドグラス、透明樹脂に包埋した魚類の標本などである。地学系では、岩石、鉱物、化石、植物遺体をバルサムまたはレークサイトセメントなどで封入したスライドグラスである。

一方、資料収集活動の一環として自然史関係の文献収集を行っている。蔵書の大部分は館発行物との交換によるが、購入以外に個人・団体・自治体などからの寄贈によるものもある。普及図書は普及センターにおき入館者の閲覧、市民からの相談や質問に利用されている。専門図書は各研究室に、逐次刊行物・調査報告書は書庫に配置されている。平成元年度末で図書が6,982冊、逐次刊行物・調査報告書が81,951冊、館の蔵書数はあわせて88,933冊である。

（3）展示活動

常設展では一貫したストーリーのもとに、標本や模型その他の資料をテーマ展示しており、展示資料数は約8,400点である。展示では実物標本にさわれる触察展示のコーナーを設け、視覚障害の方々にも理解できるよう努力している。

〔以下16ページへ続く〕

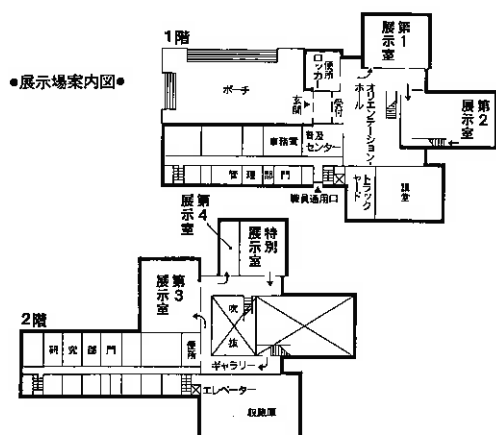


図1 展示場案内

車馬鋤の登場

森 隆 男

『阡陵』21号に、岡山県賀陽町の農家から約100点の民俗資料が寄贈され、本学の考古学等資料室に収蔵されたという角田芳昭氏の報告が掲載された。先日、それらの見学を許されたが、特に私の目に留まったのは、馬鋤を基に発明されたと思われる車馬鋤であった。多数の歯を植えた鬼車を持つ異様な形態に引きつけられたからである。

このたび収蔵された車馬鋤は、框の幅60cm、長さ64cm、把手は鳥居形で、幅60cm、長さ45cmである。後梁に植えた歯は7本で、長さ19cm、鬼車は六角形の断面を持つ軸に長さ13.5cmの歯が計28本植えられている。歯はいずれも鉄製である。鬼車の軸受部分の摩擦が激しい上、框の側面には補強材を打ち付ける修理などが施されていることから、相当長期間使用されたと思われる。また、製作者を示す刻印等がないことから地元の野鍛冶と大工によって製作されたものであろう。

我が国において馬鋤を利用した農耕は相当古くまで遡ることができ、河野通明氏は6世紀後半に馬鋤が全国的に出土し、1世紀遅れて犁が出土すると指摘している。文献では『新猿蓑記』や『今昔物語』に犁とともに馬鋤が使用されていたことを示す記事が見られる。室町時代初期の大山寺縁起絵巻（実物は焼失）には馬鋤を使用して代掻きをしている様子が描かれており、これは昭和30年代になって耕うん機が普及するまで見られた作業風景と変わることがない。

このように、馬鋤を使用する農業の歴史は少なくとも1400年以上の歴史を有するわけであるが、本稿で取り上げる車馬鋤の文献上の初見は、管見では文政5年（1822）に出版された『農具便利論』である。著者の大蔵永常は、農業の先進地域で使用されている農具が他の地域でも使用されることを願って本書を著したため、当時広く普及していた犁や馬鋤は取り上げられていない。さて、永常は車馬鋤について次のように記している。

（略）播州の地ハ土性つよき真土にて、塊われかぬるゆへ、此具を其土地に考へ合て造り用

ゆるものと覚ゆれば、土性強き所ハ法具を用ひたらバ、便利なるべき歟。播州より備中辺迄ハ、土性いたって強き土がらゆへ塊を碎にハ入農家の骨折強し。

播州は土質が粘性であるため、このような土を砕くための農具を考案したという。また、播州から備中にかけての地域が車馬鋤を使用するのにふさわしい土質であるとの指摘は、収蔵された資料が岡山県で採集されたことを考えると注目すべきであろう。なお、『農具便利論』で取り上げられた車馬鋤は、収蔵された資料に比べて4割程度大型のものであり、把手の取り付け箇所も異なる。

明治22年に刊行された『兵庫農具図解』の加古郡の部にも車馬鋤が取り上げられており、「からすにきて耕鋤せし畝背の土塊をかき砕く具なり」とあることから、畑作のための農具として使用されていたようである。ここに収録された車馬鋤は収蔵された資料と大きさや形態が比較的良好に似ている。

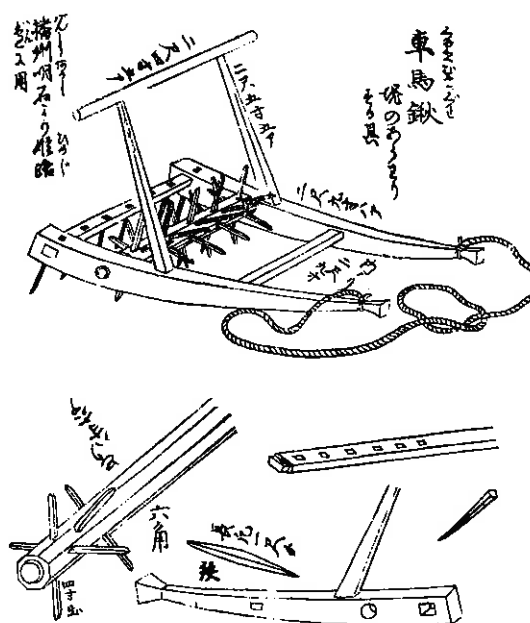


図1 『農具便利論』（文政5年刊）

明治44年5月、全国農具展覧会が開催され、当時、各地で使用されていた農具や改良を加えて売り出そうとしていた農具が展示された。そのうちの主要な農具については、解説を加えて『日本農具図説』として刊行された。その中に、香川県香川郡鷺田村の小川清次から出品された車馬鍬が収録されている。把手の取り付け位置が異なるが、収蔵された資料とほぼ同じ大きさである。「製作、材料共に可良」と解説があり、売り込み中の商品であったようである。また、静岡県富士郡加島村の山本善吉からも鬼車2個を有する大型の車馬鍬が出品されている。

近代における車馬鍬の普及状況は、河野通明氏のご教示によると、ほぼ全国的であり、四国地方ではヒヨナカシ(日傭泣かし)、中国地方ではヒヤトイダオシ(日傭い倒し)の異名があるという。これは千歯扱がゴケダオシ(後家倒し)と呼ばれて普及したように、車馬鍬の作業能率が高く、急速に普及したことを示している。

以上のように、車馬鍬は、6世紀以来使用されてきた馬鍬が近世になって粘土質の土壌、特

に畑作に合わせて改良されたものと思われ、その歴史は比較的浅い。しかし、車馬鍬の登場は、近代以後に発明された多様な畜力利用の農具の先駆となるものであった。そして、現在、鬼車を利用して土塊を破碎するアイデアは耕うん機やトラクターに受け継がれているのである。

なお、今回、資料室に収蔵された車馬鍬は上記の歴史を考える上で貴重な資料といえる。比較的古くから使用されていたと考えられる地域で採集されたことや、把手が框の後梁に取り付けられている点に注目すると『農具便利論』や『日本農具図説』に収録されたものに比べて形態的にはベースとなった馬鍬により近いといえるからである。

＜参考文献＞

- ・河野通明「馬鍬の伝来」『列島の文化史』7 1990
- ・飯沼二郎、堀尾尚志『農具』 1976
- ・『図説日本文化史大系』第7巻 1957
- ・『明治農具全集』第11巻 1985 他

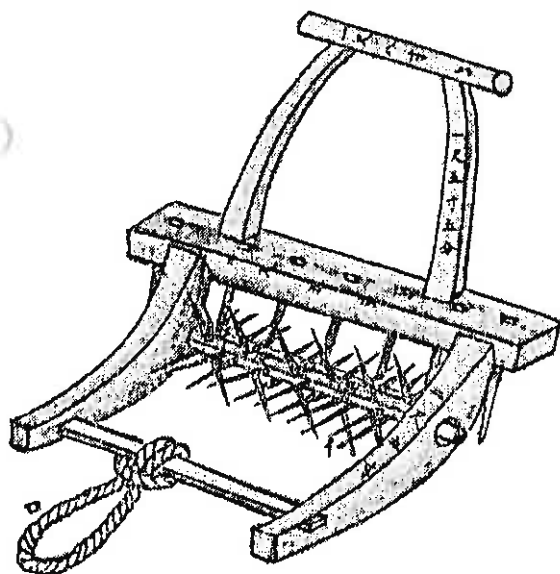


図2 『兵庫県農具図解』(明治22年刊)



写真 資料室収蔵の車馬鍬

博物館学課程開設30周年を迎えて

濱 瀬 善 雄

末永雅雄先生（関西大学名誉教授）が、文化勲章を受章されたのは、昭和63年11月のことであった。受章の知らせがあった際に、「みんなにすまんなあ。」「考古学を築いた先達、早く死んだ同期生、現在活躍中の人たちを代表していただいたようなもの。」と喜びの表現はあくまでも律儀だった。と新聞が報じていた。

私は図書館より、お祝いのことばを述べるため、狭山のお宅を訪問した。その際、いろんな回顧談に花が咲いたが、やはり、関西大学文学部教授として在職された時代に話題が及んだ。私は、文学部の事務室に勤務している間、末永先生には大変お世話になった。文学部史学科は、考古学に関する授業は末永先生が中心となって行われていた。昭和29年に末永先生のご尽力によって、元毎日新聞社社長、本山彦一氏の旧蔵資料のうち、図書1,000余冊は図書館が受入れ、考古学資料約10000点は考古学資料室に収蔵されていた。その後、高松塚、藤の木古墳などの発掘には本学の学生が網干教授の指導の下に発掘に従事した。それと同時に資料も増加し、現在は13,000点に達している。

博物館法は昭和26年12月に制定され、それに伴い「博物館には専門職員として学芸員を置く」とし、「学芸員は博物館の資料、展示、及び調査研究、その他これと関連する事業についての専門的事項をつかさどること」と定義づけられた。その当時、関西大学では博物館課程は設置されていなかった。昭和35年の秋に、文学部教授会において博物館学課程を設置することがはかられ、末永先生に私がお供して、文部省社会教育課を訪問することになった。末永先生のご親戚に当たられる菊井維大教授の立教大学法学部研究室にお伺いし、当時菊井先生は文部省の大学設置審議会の委員をされていた関係上、文部省との折衝のノウハウをお教えいただいた。社会教育課において担当係官は末永先生を大変よく存じており、関西大学が博物館学課程がまだ設置されていないのが不思議だということのような感じであった。一般論として学芸員の乱造を

いましめる話があった。その時、係官が関西大学は末永先生がおられるので大丈夫であるとのことばがあった。末永先生のお考えも同じであり、大いに同感された。

昭和35年12月20日に申請を行い、昭和36年4月に博物館学課程の設置が認可され、國學院大学などの先輩大学他の実情を調査して、特に博物館実習については、バラエティに富んだカリキュラムが組まれた。第1期生は選考の結果、大学院生2名、4年次生5名、3年次生4名、聴講生5名計16名でスタートした。私も担当者として、末永先生、小野勝年講師と共に色々お手伝いをさせていただいた。博物館実習においては、天理参考館などを訪問して、天理教の宿舎に泊まったこと、東京方面の実習（東京国立博物館など）にも参加させていただき、末永先生を中心として第1期生は和気あいあいの中、厳しい指導がなされたことが眼前にほううつされる。結局16名中13名が学芸員の資格を取得した。受講生の中で今、各分野に活躍されている方々を紹介すると、石野博信氏（奈良県立橿原考古学研究所副所長、同博物館長）亥野彊氏（八代学院大学講師）小西愛之助氏（大阪芸術大学教授）岡幸二郎氏（奈良県立橿原考古学研究所附属博物館総括学芸員）猪熊兼勝氏（奈良国立文化財研究所飛鳥資料館学芸室長）角田芳昭氏（考古学等資料室主任）であった。当時は本学の学芸員を権威あらしめるために資格単位取得申請者は末永、小野両先生の書類選考によって始めて資格申請が出来るというように厳選されていた。博物館学課程が開設されて、30年が経過した。末永先生のあとを受けて、網干善教文学部教授が指導を続けられ、昭和36年より平成2年までの学芸員の資格取得者は1,088名に達した。現在学芸員養成講座を開設している大学は、国公立大学で約130大学にのぼり、毎年3,000人以上を上回る有資格者が社会に出て行っている。

近年は博物館ブームの気運にのって、特に地方自治体の首長が「地方の文化」をアピールす

る一つの手段として、博物館建設が一つの流行になっている。昭和62年のデータであるが博物館・園の設置数は2,574館に達している。アンケート調査（博物館研究 Vol. 23 No. 8「博物館芸員の実態」）によると回答1,263館の中、学芸員0名が412館あるという事実である。学芸員の資格は図書館の司書の資格と同様、大学卒業に際して、取れる資格は取得しておこうという考え方が強く、博物館・図書館へ就職する人は非常に少ないのが実情である。

しかし、こうした資格はあくまでも基礎資格であるという考え方であって、各自が一つの専門分野をもってその知識を深めていくことが必要である。学芸員においては、資料収集、保存、管理、調査、研究、教育、普及活動などを行うことになっているため、学芸員として勤務する中で経験を積み重ねながら修得していかなければならない。専門分野のスペシャリストになることが必要である。ということは、博物館学芸員も図書館司書と同様、資格はあくまでも基礎的な知識の修得というレベルである。現在では、大学院修士課程修了以上の学力が要求されている。

博物館においては、常設展の他に特別展という企画展が年間行事として開催されているが、一つのテーマのもとに陳列、解説、目録作成という手順によって所蔵資料だけでなく、他の博物館より資料を借用して展示が行われている。これに伴って、学問の専門性は益々細分化されつつある。さらに、博物館においても、コンピュータが導入され、コンピュータによる資料の登録、管理、検索などが行われてきた。そのためには、学芸員自らが勉強して、システム設計を行い、データの入力、検索が必要となる。国立民族学博物館において導入されている、文献情報検索システムは図書館のシステムと共通している。図書、逐次刊行物、貸出の各サブシステムが開発され、検索のためにJP/MARC、LC/MARCが活用されている。特徴的なものには、標本資料ライブラリーシステム、映像資料ライブラリーシステムが挙げられる。資料が立体的なものであるため、このようなシステムが必要となっている。それには、コンピュータに関しての人材育成が必要となる。しかも、学芸員が自らシステム設計して運用し、改善をやる

必要があることであろう。更に、データ量は必ず無限大に増加していくものだから、その要量の問題が問われている。

平成3年4月1日にオープンした姫路文学館は、近年の文学館ブームにのって、郷土出身の歴史学者、文学者の原稿、書簡、遺品、著書を収集して整理、保存に当たっている。この文学館では司書が採用されているかは定かではないが、テレビの紹介画面では学芸員が運営について説明を行っていた。図書・原稿などを平面的に並べるだけでなく、文学者の執筆環境の再現などをおこなっている。また、映像や音響などによる解説に力をいれている。司書でなく学芸員ということは、文学館としては、資料の整理よりも展示の方にウェイトが置かれているのであろうか。

今後、博物館・美術館・動物園・水族館・文学館・図書館という個別的な考え方は薄れる方向にあるのではないだろうか。要するに学芸員・司書に共通するものは、その専門性の追求にあるということは、はっきりしてきたことである。しかも、これらの施設に更に共通する点は、利用者あつての施設である。利用者がその館に何を求めているかについて、そのニーズを把握する必要がある。博物館等において、常に展示物についての新しい方策が展開される努力がなければ、また図書館において利用者のニーズに即応する蔵書構成と、サービスがなされないと、いずれも利用者から見放されることに気付くべきである。

本学考古学等資料室も来年度を目指して「博物館相当施設」として大阪府教育委員会に申請を計画されており、博物館学課程において、ニューメディアの知識を導入するなど、新しいカリキュラムが取り入れることが急務であると考えている。

5月7日、この原稿の校正をしているとき、ふと思いついて末永先生の著書『常歩無限』を読みかえしていた。その時、テレビニュースが先生が死去されたことを報じた。先生が何か私に話しかけられたように感じた。こゝに先生のご冥福をお祈り申し上げる。

このコーナーには点字解説板をつけてあるほか、展示の概要を紹介した点字によるパンフレットも用意してある。

このほか年1回の特別展と年数回の特別陳列を企画し、調査研究の成果や館蔵品の紹介を行っている。

(4) 普及教育活動

自然に親しみ理解を深めるための社会教育活動として、年数回の野外観察会や室内実習、毎月の自然史講座と科学映画会など各種の普及行事を開催している。

4. おわりに

これらの事業を相互に関連させることにより、質の高い博物館活動が可能になる。

編集後記

『阡陵』23号をお届けいたします。原稿をいただいた最初は2月下旬で雪の降り積った日でありましたが、今は新緑に陽光が映え、その下を学生達が楽しく語らいながら通り過ぎていきます。季節の移りには驚かされます。原稿をいただいた諸先生方に改めてお礼申し上げます。

平成3年度・4年度にわたる資料室運営委員が決定し、委員長には網干善教文学部教授、副委員長には上井久義文学部教授が選出され、前年同様の執行部となりました。よろしくご指導の程お願い申し上げます。

本資料室を今日の充実発展にお導びき下さいました末永雅雄先生が去る平成3年5月7日午後2時30分ご逝去されました。ここに謹んでご冥福をお祈りいたします。所蔵資料の大部分(約10,000点)は元毎日新聞社長本山彦一氏蒐集品で、その膨大な全資料を関西大学へ移管されるのにご尽力下され、その資料を活用し多数の考古学徒が育ち、社会で活躍しています。先生は日頃より博物館設立につき熱っぽく語られていました。学芸員養成の

博物館学課程も先生のご尽力で昭和36年開講され、本年でちょうど30周年になります。その間多数の学芸員資格取得者が博物館、美術館あるいは都道府県及び市町村の文化財担当者としても従事し、業績をあげています。またこの人々の執筆により、記念論文集の発行も計画されております。資料室は2,000㎡の床面積があり、博物館担当施設として申請するに基礎的条件はそろいました。この30周年を記念に設立要望書が提出され末永雅雄先生の学恩に報いることができれば望外の喜びです。管理運営委員の諸先生及び教学、法人のご指導ご支援をお願い申し上げます。

表紙の写真は「須恵器」台付碗で高さ12.8cm、口径10.4cm、台部底径9.8cmの整形の美しい灰白色の土器でロクロは右まわりである。深い碗にふんばった脚がつき、口縁はやや内彎し、中央には沈線1条が入り、底部近くで幅広い沈線1条が走っている。愛媛県温泉郡出土と朱書されている。出土例として奈良市富雄丸山2号墳、徳島県恵解山5号墳などがある。

〔角田芳昭〕